

## ◆奨励賞◆

### 言葉のギャップ

中原 中学校 三年

中西 彩花

皆さんはジェネレーションギャップという言葉を知っているだろうか。ジェネレーションギャップとは違う世代を生きた人の間で生じる、価値観、思想、文化などの相違のことである。異なる世代の多様な人々が生きる社会では、このギャップを感じる人も多いと思う。中でも私は「言葉」についてふと考えたことがある。

最近「死ぬ死ぬ構文」というものが流行している。これは自分が感じたことや、すごいと思ったことを「〇〇すぎて死ぬ」というテンプレートに則って表現することである。この構文を日常会話で気にせず使っている若者も多いだろう。私も友達との会話で使ったことがある。ただ、ある日「若者が使っている死ぬ死ぬ構文があまり好きじゃない」という投稿を見て私はハッとした。「死ぬ」というのは本来いい言葉ではない。これを聞いて大切な人を失ったことを思い出してしまう人や、悲しい気持ちになる人もいるかもしれない。古文でも「死ぬ」という言葉は縁起が悪く、「隠す」などの隠語にしていたことも習った。このような観点から見ると、俗に言う若者言葉というのは本来あまりいうべきではない言葉を軽々しく使いすぎているようにも思える。

また、言葉を略し過ぎているという意見もあるそう。代表的なのは「バイト先」を「バ先」と言ったりと、一回聞いただけでは意味がわからない

ような言葉になってしまっている。改まった場や目上の人に対しても、無意識に略語で話してしまう若者もいると母から聞いた。これは、言語の退化だと捉える人は少なくないだろう。

一方で次のような考え方もある。「テンパー」や「ワンチャン」という言葉は麻雀用語から来ていたり、「ビビる」という言葉は平安時代から使われていて、その成り立ちは大軍が動き鎧が触れ合うときの「びびる音」から来ているそう。昔から使われてきた言葉を言いやすかったり、わかりやすくして新しい言葉を創造する。これは言語の進化とも言えるのではないだろうか。少なくとも私は、そう捉えて若者言葉を排除するのではなく、それぞれの世代がお互いを理解し合う方が価値的だと思う。

しかし、使う場面を考えることがとても重要だ。公共の場などでは聞いている人の気持ちを考えて、適切な言葉遣いを心がけること。世代間のギャップがあることを前提として発言し、尊重し合うこと。流行や周りに流されすぎず、「自分の言葉」を大切にすること。これらのことを忘れずに様々な世代間で交流ができれば、私達の言語はもっと楽しく豊かになると思う。